BALANCER　AFTER～バランサーアフター～

高田ねお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＡＬＡＮＣＥＲ　ＡＦＴＥＲ～バランサーアフター～

【Ｎコード】
Ｎ９８１８Ｓ

【作者名】
高田ねお

【あらすじ】
学園内で起きた『異界』騒動から、二ヶ月。俺は満身創痍だった。あの角突き桃尻女、散々バランサーの仕事に俺を巻き込みやがって。過労でぶっ倒れる寸前だぞ、こんちくしょう。
学園生活とバランサーの仕事を無理矢理両立している最中、クラス委員長の君塚瑞穂から告げれる一言で、また、俺の疲労感は増す！　ちきしょーーー、俺の自由を返せえっ！　『ＢＡＬＡＮＣＥＲ～バランサー～』の後日談、ここに開幕！　バトルはないけどコメディは頑張ります！（続編ではなく、番外編です）

第1話『満身創痍！　沢津拓真の憂鬱』（前書き）

以前、載せていた作品『ＢＡＬＡＮＣＥＲ～バランサー～』の後日談です。前作のネタバレはありますが、単体でも読めるような造りにしていきますので、よろしくお願いします。今回は『異界』やらバトル劇のお話はナシ。拓真を中心とした学園生活をだらだらと描いていきます。

第1話『満身創痍！　沢津拓真の憂鬱』

「それでは今日のホームルームを終了する。――――委員長」
「起立。気をつけ。礼！」

クラス委員長の君塚瑞穂（きみづかみずほ）の号令が終わると、クラスは途端に華やかなざわめきに彩られた。これで今日の授業は終了だ。この後に待っているのは楽しい楽しい放課後の時間である。部活があるものは各々が没頭できる活動に打ち込み、フリーダムな時間を満喫する帰宅部の連中は帰りに何処へよるかの談話に興じている。

俺は後者の帰宅部だが、学業から解放された喜びよりも、安堵の方が勝っていた。

号令が終わった瞬間、椅子に座り込み、冷たい机に顔面を乗せて、大きく嘆息する。

「はあ……よ、ようやっと終わったあ」

今日も一日きつかった。頭がくらくらして、身体に力がはいらねぇ。端から見れば、なにを大げさな、と思うだろう。だが、これはオーバーリアクションでも何でもない。

俺は疲労困憊していた。ここから家へ帰るのもおっくうな位しんどい。このまま寝てしまいたいくらいだ。

「おーい、沢津くーん。寝るなら他の場所にしてよ。このままじゃ机を後ろにさげられないぞー」

と、俺の頭上からそんな声が聞こえてきた。身体中を覆うだるさ

をこらえながら、顔を上げると、ショートカットの女生徒がノートを丸めて俺の頭をぺしぺしと叩いてくる。
ナイスバディな女の子だった。
全身がきゅっと無駄なく引き締まってるのに関わらず、おっぱいの部分がぽぽぽーんなことになってる。顔は二ヶ月前、俺が入院してたとき瑞穂と一緒に来ていた友人の一人だった。名前は……なんだっけか。
マジマジとその豊満な胸を眺めながら、頭に思いついた名前を口にした。

「おっぱいちゃん」
「おっぱいちゃんっ！？」

俺の言葉を反芻して、大きく目を見開く。あれ、違ったっけか。
「ずいぶんと失礼だよね、君は。顔を上げてみるのがあたしの顔じゃなくて、あたしの胸かい。そして、何の躊躇もなく、その言葉をあたしの名前に当てはめるのが。もうなんというかすごいね。というか、いい加減名前ぐらい覚えたらどうなのよ」
淡々とした口調で俺に突っ込みを入れながら、丸めた教科書を幾度も俺の脳天にべしべしと叩きおろす。いくら強く叩こうが所詮はノート、痛くはない。むしろ、至福だ。
俺の眼前で放漫なおっぱいが俺を叩く動作によって、ぶるんぶるーんと縦に揺れている。
眼福だった。至福だった。
思わず、両手の手のひらを合わせて、お辞儀をする。
ありがたや、ありがたやあ。おっぱいちゃんは呆れ顔で、

「……よくもまあ、そこまで人の胸、ガン見できるよね。ここまで欲望に忠実な男の子も珍しいよ」
「お褒めに預かり恐悦至極」
「や。誉めてないし。全然誉めてないよ」
「揉んでいい？」
「揉むなっ！」

両手をわきわきとさせながら、おっぱいちゃんのナイスバストに手を近づけたら、思い切り頭をノートで叩かれた。今度は丸めた縦の部分をぶつけていたので、ちょっと痛かった。

「バカなことやってないで、とっとと机下げて！　後ろが支えてるんだから！」
「ちっ」

めんどくさいと思いながらも、俺は立ち上がり、机を後ろに下げた。元々一番後ろの席だから、一瞬で終わった。すぐさま再び椅子に座り、机に突っ伏す。

「……いや、それじゃあ掃除班の子たち机戻せないじゃん。用がないなら、とっとと帰りなよ」
「大丈夫だ。問題ない。後五分したら動くから、それまでそっとしておいてくれ」

そう言って、机の上に頬をおいて、ぐりぐりする。ひあー机の上の冷たい感じがなんともいえず心地いー。そんなことをしていると、おっぱいちゃんが俺の顔のそばに顔を近づけ、じっ、と見つめてくる。

「う～ん、沢津くん。ちょっと顔色が悪いよ。目の下にクマもでき

てるし。体調悪いの？」

心配そうな表情でおっぱいちゃんはそんなことを言ってきた。あらまあ、見抜かれてやんの。なかなか鋭いじゃないか。俺は手をひらひらさせながら、「平気だ」と、言った。

「ちょっと最近色々あってだな。少しばかり疲れがたまってるんだ。別に体調が悪い訳じゃないんだが」

「ふぅん……部活の練習がきついとか？　沢津くんって、なんの部活入っていたっけ」

「放課後の自由を満喫するロンリー帰宅部だ。ただいま、部員募集中。おっぱいちゃんも入部するか？　今なら入部特典として、アイスのガリガリ君のコーラ味と俺と二人きりでツイスターをする特別招待券をプレゼントだ」

「や、あたしテニス部入ってるし。その特典いらないし。あとおっぱいちゃんっていうな。あたしの名前は中原初美（なかはらはつみ）よ。いい加減覚えなさい」

いいながら、再び丸めたノートで叩かれた。むう、いいネーミングだと思ったんだがなあ。まあ、本人が気に食わないというのなら仕方がない。普通に中原さんと呼ぶことにしよう。中原さんは嘆息して、

「で？　部活も入ってないのに、なんでそんなに疲れてるの？　勉強のし過ぎとか？」

と、言った。俺は顔をぶるぶると左右に振った。この疲労は精神的なものじゃない。肉体的なものだ。部活でもない、勉強でもない。この疲労はボランティアに近いものだ。俺の曖昧な説明に中原さんは顔をしかめた。

「ふーん。なんだかよくわからないけど、そんなにきついなら止めちゃえばいいのに。沢津くん、ずいぶんと辛そうな顔してるし、あまり無理はしないほうがいいんじゃないの」
「俺もそうしたいのは山々だが……」

サラサの奴、俺のいうことなんざ聞きやしねえからなあ。再会した『あの日』から、マイペースを崩さず、俺を引きずり回しやがる。

この俺――沢津拓真（さわづたくま）は二ヶ月前、『第三階層』と呼ばれる次元からやってきた角付き少女サラサと出会った。彼女は『多次元（バラン）因果律管制機構（サー）』と呼ばれる世界中にある因果律バランスを管理する組織の見習いである。このサラサという少女が俺のいる次元『第五階層』にやってきた理由はその組織の正式な一員になるための試験を受けるためだった。

俺は成り行きでサラサの試験の手伝いをし、結果、彼女は無事試験に合格して、一人前の『バランサー』になることができたのだが――――

どうしてこうなった。

まさかサラサがここの次元担当になるなんてご都合主義、予想だにしていなかった。それはいいとしても、何故、俺が一緒に『異界』の歪みの修正につきあわなければならないのか。本部では俺は『バランサー』の特別訓練生として扱われているらしいが、冗談じゃねえ。

俺は『バランサー』になるつもりなど、毛頭ないのだ。俺はサラサにそう言ったが、『またまた拓真さん、遠慮することないのですっ！』とか抜かして、俺をあちこち振り回す始末。ほんと、再会し

てからのアイツは人の話をなかなか聞ききやがらねえ。

部活も習い事も塾すら通ってない帰宅部の俺が満身創痍となるわけだ。無理矢理見習いとしてつきあわされてから、かれこれ二週間。おかげでこの様である。

俺の身体の限界も間近にまで近づきつつあった。

「なんか大変そうだね……」

「うむ。これくらい平気だ、と見栄を張る余裕がないくらい大変だ」

「そこは少し男の子の根性を見せてほしいところではあるんだけどね」

「揉んでいい？」

「揉むなっ！　っていうか、前後が繋がってないよ！　なんで揉むのさ！」

「男の子は女の子の身体に触れることによって、パワーを充電することができるのだ。セクハラすれば、俺はあと百四十六秒戦える！」

「そんな説初めて聞いたよ！　なにその微妙な数字！　というかセクハラは普通に犯罪だから！　パワー充電する前に少年院行きだって！」

「ガタガタ抜かしてないで、乳揉ませろや、オラ」

「開き直るなっ！」

わきわきと手を動かして、中原さんの胸に手を伸ばしたら、すぱぁんと、思い切り教科書で叩かれた。中原さんは大きく嘆息した。

「はあ……まあ、それだけおちゃらける元気があれば大丈夫だね。ホラ、とっとと帰った、帰った」

そう言って、中原さんは俺の腕を引いて、俺を無理矢理立ち上がらせ、そのまま強引に俺を教室の外へ放り出した。そのまま俺は廊

下の床をごろごろと転がる。

「いでぇっ！　な、なにすんだ、このっ！」

すぐさま立ち上がり、文句を言おうとした刹那、俺の鞄を顔面に向けて投げてきて、見事直撃した。

「ぬおおおっ！？　鼻！　鼻を打ったぞっ！　じんじんとして重傷じゃ！　殿の一大事じゃっ！　医者をよべぇぇぇぇっ！」

「血も出てないんだから、大したことないっしょ。すぐに教室から出ない君が悪いんじゃない」

むう、なんて乱暴な女だ。もう少し、クラスで唯一の異性をいたわろうという気持ちがないのか。

「あたしにそういうポリシーはないの。それにあたしが余計なちょっかい出して、親友を悲しませたくないからね。女の胸で甘えたかったら、もっといい子がいるでしょう？　じゃね」

一方的によくわからない台詞を投げつけ、そのまま中原さんは行ってしまった。スポーツバックを持っているところを見ると、部活に行ったのだろう。あのアマ、男を舐めやがって。今度は必ず、あのたゆんたゆんおっぱいを鷲づかみにして、女の子らしい甲高い悲鳴を鳴かせてやる。覚えてやがれ。

そんなことをぶつぶつと呟きながら、俺は立ち上がった。おっぱいちゃんの乱暴な扱いに、腹立たしさを覚えたが、確かに言うことには一理ある。ここでは休んでいてもまともに疲れは取れないだろう。疲れを取りたいのなら、自宅のベットで寝るべきだ。動くのはかったるいが、その方がいいだろう。

俺ははあ、と大きな溜息を吐きながら、鞄を拾い上げると、だるさに包まれた身体に鞭打って、昇降口に向かって歩き始めた。
――――と。その時だった。

「拓真くん」

背後から声がした。振り向くと、そこには一人の少女が立っていた。小柄な身体。さらさら髪のセミロング。頭には水色をしたチェック柄の大きなリボンがつけられている。
Aクラスのリーダー、君塚瑞穂嬢である。神妙な表情を浮かべて、じっとこちらを見ている。

「おう。瑞穂。お疲れ」

ひらひらと手を振る。瑞穂は頷き、

「う、うん……お疲れさま」

と、短く答えた。彼女はクラスをうまくまとめ、委員長としての仕事をてきぱきとこなす、スーパーガールだ。Aクラスの生徒からも信頼され、支持されているし、悩み相談なども頻繁に行ってるらしい。
その凛としたその姿は俺の知っていた瑞穂とは違い、未だに戸惑うことがある。
瑞穂は俺とは六年前の遊び仲間で、引っ越しを期に離ればなれになっていたが、偶然にもこの学園で再会を果たした少女だ。
六年前、瑞穂と別れる前、『再会する機会があったら、俺の方から見つけだしてやる』と約束したにも関わらず、俺は彼女のことを

気づかなくて、憤慨されたのだが、それも無理ないと思う。ここまで変わっちまった、しかも成長期の女の子の姿を気付く方がどうかしてる。未だに六年前と現在のギャップに戸惑うことがあるくらいだからな。

しかし、彼女は紛れもなく六年前に分かれた『泣き虫みぃ』と同一人物だ。それは間違いない。

普段教室にいるときは凛とした頼りがいのある『委員長モード』なんだが、俺と二人の時や、周りに知り合いがいないときにはその様はなりを潜めて、俺のよく知っている性格に戻る。人の言うことに一喜一憂して、すぐぼろぼろ泣く『泣き虫みぃ』の姿だ。

どうにも、人目が多いときは委員長としての自分が抜けきれず、昔の自分をさらけ出せないらしい。病院での一件がクラス中に広まり、俺と瑞穂が幼なじみであることは周知の事実なんだから、別にそこまで気にする必要はないと思うんだがなあ。

俺は以前そう言ったことがあったが、自分でもどうにもできないらしい。器用だか不器用だか、わからんやつだな、まったく。

そんな難儀な性格の瑞穂だが、今日はその様になにやら違和感があった。

上目遣いに俺を見て、口に手を当てながら、じっ、と黙り込んでいる。この挙動は委員長の瑞穂が見せる仕草ではない。『みぃモード』の瑞穂だ。自分のクラスの前であるし、廊下にも生徒がたくさんいるのに関わらず、地の自分をさらけ出している。

なんだ、めずらしいな。

「どうした？　瑞穂、今日は掃除当番じゃないだろ。部活にいかなくていいのか？　おっぱいちゃ――――――じゃねえや。中原さんは一

足先に行ったみたいだぜ」
「あ、うん。あたしは今日は……いいの。今日はちょっと……」
「ふーん、委員長の仕事か？」
「そうだ、ね。そうなんだけど……」
「……」
「……」

そのまま黙り込んでしまう。どうしたんだ、こいつ。なんか様子がおかしいな。

「変だぞ、お前。なんかあったのか？」

眉を潜めながら、そう訊くと、瑞穂はとたんに瞳を潤ませ、

「ううっ……ぐすっ……」

と、嗚咽を漏らして、泣き始めた。俺は大きく目を見開いた。

「ええ！？　ちょ……ちょっと！　どうしたんだよ、おい！」

慌てて問いつめるが、瑞穂は答えない。大粒の涙をぽろぽろとこぼして、両手で必死に拭う。なんだってんだよ、いったい！　俺、なんかしたか？

その俺たちの様を見て、周りの生徒が、ざわめき始めた。

『ちょっと……瑞穂泣いてるよ、どうしたの？』
『沢津くん？　沢津くんが原因なの？　ちょっと！　委員長にいったいなにをしたのよ！』
『ひどい、女の子を泣かせるなんて！　沢津くん、いい人だと思ってたのに……見損なったわ！』

完全に元凶が俺になってた。なんだこの既視感（デジャヴ）。いや、この状況じゃそう思われても仕方がないんだが、俺はなにもしてねぇぞ！どうしたってんだよ、一体！

ともかく、このままじゃまともに話も出来ない。何も言わず、泣きじゃくる瑞穂の手を強引に掴み、

「瑞穂！　こっち来い！」

と、彼女を連れて、駆け出した。瑞穂は戸惑いの声を上げながらも、俺についてくる。

ともかく、人気のないところ――落ち着いて話せるところにいこう。俺は瑞穂の走る速度に合わせながら、廊下の一番奥までいき、今は使ってない空き教室の中に駆け込んだ。そのままドアをぴしゃんと閉めると大きく俺は嘆息した。

「はあ……びっくりしたあ……なんだってんだよ、いったい」

「ご、ごめんなさい……拓真くん、あ、あたし……・泣くつもりじゃ……ぐすっ」

「あ――、そう言いつつも泣いてんじゃないか。何があったんだよ、いったい」

「……」

俺の言葉に瑞穂は再び俯き、黙った。なんだろう、いったい？訳が分からないが、口ごもってるところをみると俺が原因らしい。はて、俺、なにかやっただろうか。

困惑してると、瑞穂が意を決したように、顔を上げて、口を開いた。

「あのね……あたし、拓真くんに……大事な話があるの」

第1話『満身創痍！　沢津拓真の憂鬱』（後書き）

続くよ！

第2話『ショック！？　担任の無情な通達（そうでもない）』

瑞穂に言われ、連れられてきたのは職員室であった。うちの担任教師の呼び出しらしい。瑞穂の話を聞いて、俺は露骨に眉を顰めた。何故、瑞穂経由で担任から呼び出されるんだか。

それにホームルームの後、すぐに呼び出してくれれば、すぐに応じたのにどういう訳か、かなりのタイムラグがあった。俺が早々に帰ってしまっていたら、呼び出しに応じられなかった筈なのに。どうにも要領が悪いな。

そんな疑問を投げかけてみたが、どういうわけか瑞穂は一切答えてくれなかった。顔を曇らせ、黙ったままである。

この反応を見てると、とんでもないことを告げられそうな気がして、なんだか不安になってきたぞ。

一応、心構えだけはしておくか。俺は両足を広げて腰を沈め、手刀を垂直にして構えた。俺の最強の構えだ。俺の水平チョップはあらゆる暴言や毒舌を切り裂く。担任にどんなショッキングなことを告げられても、すべてこの伝家の宝刀で無力化してやるぜ。俺は腰を深く沈めたまま、ドアを開き、『ヘアッ！』とかけ声を上げると、瑞穂と共に職員室の中に入った。

広々とした空間に定期的にデスクが敷き詰められている。何処にでも見掛けるごく普通の職員室だ。ただ、もと女子校ということもあり、この学園には女の教師が多い。すべてが女子の学校だとメン

タル面や生理痛などの女性特有のトラブルがあったとき、男の教師だけでは対処仕切れない事が出てくるからだろう。大体、教師の割合は女性が8、男性2といった比率らしい。

もっとも、本年度からは共学になったことで、今後はもう少し増えていくだろうがな。

辺りを見回すと、赤ペンを持って、用紙に採点している教職員の姿が目立つ。

そう言えば、期末テストが終わったばかりだったな。全クラス分のテストの採点するのって、大変なんだろうな。

そんなことを考えながら、周囲を見回し、担任の顔を探す。え～と、ウチの担任は何処の席だっけか。

「こっちよ、拓真くん」

困惑している俺に瑞穂が助け船を出し、俺を誘導する。俺は先を歩く瑞穂の後を着いていった。職員室の一番中央にある席だった。そこに見慣れたうちの担任教師が座り、紙面にボールペンを走らせながら、作業をしていた。瑞穂とデスクの真横に立ち、

「先生、連れてきました」

と、言った。担任教師はボールペンを止めて、こちらを向き、頷く。

「おう。ご苦労さん」

野太い声で、そう答える。うちの担当は男性の教師だった。髪の毛は短めの五分刈り、髭はもじゃもじゃ、国語の教師なのに体つきが筋骨隆々という、なんだかよく分からない中年の男性である。通

称ヒゲ先生。

「よく、残ってたな、沢津。もうとっくに帰ったかと思ってたがな。よかった、よかった。わははは」

豪快な笑い方で、そんなことを言う。何だか悲しくなってきた。思わず涙をぽろぽろと零してしまう。ヒゲ先生が俺をぎょっとしながら、俺の顔を見て、

「ど、どうした、いきなり泣き出したりして。どっか痛いのか？」

と、心配そうな表情を浮かべて言う。俺はふるふるとかぶりを振った。

「俺は……先生の姿を見る度に悲しい気持ちになります。なんで、せんせーはヒゲなんだろう。どうして、男の教師なんだって」

「……どういう意味だ？」

「だっておかしいじゃないすか！　なんで男の教師が少ないのに、よりによってAクラスの担当が男の教師なのかっっ！　しかもこんなヒゲモジャのっ！　可愛い二十代お姉様タイプの女性教師を超絶期待していたのに！　こんなの反則だっ！　裏切りにもほどがあるっ！」

「やかましいわっ！」

拳を強く握りしめ、涙を流しながら、そんなことを訴えると、ヒゲ先生がゲンコツで俺の頭を思い切りぶん殴ってきた。いてえ。超いてえ。俺は両手で頭を抱えながら、うずくまった。

「お前がいるAクラスは女生徒でばかりだろうが。それに付け加え、女教師まで所望とはどれだけ女に飢えとるんじゃい」

「先生はなにもわかってない。クラスの女子と女教師じゃまったくベクトルが違うんすよっ！　俺には夢があったんだ！　若い超美人な先生に『俺……悩みがあるんです……俺の身体どこか欠陥があるんじゃないかって……』って、夕暮れの誰にもいない教室の中、相談を持ちかけて、『拓真くんは何処もおかしくないわよ。先生が……確かめてあげる……』って答えて、俺の身体の隅々まで、先生が俺の身体をまさぐって、そのままめくるめく官能の世界に――――」

「ＡＶの見過ぎじゃあああああっ！？　そんな教師、現実にいるわけないじゃろが！！」

「いますよっ！　そういった前例があって教師が退職になったってニュースもあったんですから！　これだけ転校重ねても、若い美人教師になかなか巡り会えなくて、元女子校だったここなら今度こそ巡り会えると思ったのに、ヒゲなんて！　先生の嘘つき！　ヒゲモジャ！　おたんこなすっ！　胸毛モジャ――――ぐぶおっ！？」

再びゲンコツが振り下ろされ、殴られた。いや、ほんの挨拶的な冗談なのに容赦なさ過ぎだろ。頭がくわんくわんするぞ。

「さ、沢津くん、大丈夫？」

瑞穂が心配そうな声で言ってくる。優しい奴だな、瑞穂は。俺はしゃがみ込んで、踞りながらも、右腕だけを垂直に上げ、親指をぐっ、と立てて、それに答えた。

アイル・ビー・バック。

「本当に変なヤツじゃのう……コイツはいつもこんな感じなのか？」

「え？　は、はい。いつも元気で明るいです」

「モノは言いようじゃの……どうとでも取れる言い方が日本語ってヤツじゃ」

うっせ。ヒゲモジャ。だまらっしゃい。

「まあ、こういう性格なら尚更じゃな。Ａクラスでも浮いてしまうだろうし、いい機会かもしれんぞ」

「せ、先生……」

……？　何の話だ？　俺は眉を顰めながら立ち上がり、ヒゲ先生を見た。ヒゲ先生は自分のモジャヒゲをじょりじょりとさすりながら、俺の顔をじっ、と見つめ、

「沢津――お前、他のクラスに編入する気はないか？」

と、言った。

「へ？」

言ってることの意味が分からず、目をぱちくりさせていると、ヒゲ先生がデスクの中から一枚のプリントを取りだし、俺に差し出してきた。受け取り、プリントを読む。そこには科目ごとのテストの点数、総合の平均が記されている。

「まだ、みんなには配布されていないが……この前行った期末テストの結果だ。どうだ？」

「……ぐ」

返事が返せない。今回、あまり出来が良くないとは思っていたが……ここまでヒドイとは。平均が９０以下まで落ちてしまっている。

「他のクラスだったら、充分及第点で、文句などない点数じゃが……お前の在籍するクラスは学園上位４１名を抜擢した特別な生徒の

集まり――Aクラスじゃ。この点数の低下は正直、ワシとしても見過ごすわけにはいかないんじゃ」

ふぅ、と溜息を吐き、ヒゲ先生は続ける。

「それに付け加え、お前、最近午後の授業を頻繁にさぼっておるじゃろ？　しかも体調不良などの明確な理由はほとんどなしに休んどるせいで、学年主任からもクレームが来てる。期末テストの成績とのダブルパンチでな」

確かに下がる心当たりはあった。今回、バランサーの手伝いをし始めた時期が期末テスト前に重なってしまったのだ。授業とバランサーの仕事の両立で体力を使い果たし、試験前にも関わらず、まったく試験勉強が出来なかったのだ。

午後の授業のサボリも同じ理由からだ。さすがに最初の一件以来、授業をサボって、バランサーの出動を行うことはなかったが、昼休みを利用しての出動は幾度もあったのだ。

『異界』の浄化が昼休み時間中に終わらず、午後の授業にまで食い込んでしまい、結果、授業をサボってしまうという日が幾度かあった。今日も同じことがあって、昼食食べてないんだよなあ。おかげで腹が減って仕方がない。

しかし、まずったなあ。今まで適当な言い訳でサボってきたが、そんな口実が通用するほど甘くはないよなあ。Aクラスだもんな。サボリで不信感を抱かれ、今回の期末テストの結果で、完全に留めを刺されたわけだ。そこから至る結論はひとつ――――

「Aクラスから……除籍、ですか」

ヒゲ先生は深々と頷いた。あー、やっぱりか。俺は頭を掻きながら、嘆息した。ヒゲ先生は目を細めた。

「確かにそれが原因ではあるんだがなあ……ワシ個人としても、お前はAクラスじゃない方がいいんじゃないかと。そう思っとるんじゃ」

瑞穂が傍らで俯きながら、ぴくりと身体を震わせた。

「どういう……意味ですか？」

「とぼけんでいい。お前、クラスの連中に溶け込めないで、孤立していたじゃろ？　Aクラスの異物して扱われてきたことはワシも知っとる」

「っ！」

俺は大きく目を見開いた。このおっさん、クラスの状況分かってたのかよ。

「一応、これでも担任じゃからな。なんとなくは気付いておった。それにワシも、クラスメイトが全員女子の中に一人男子を放り込むのは正直どうかと思っていたしな。そしたら、案の定じゃ。ま、他のクラスでもどういう訳か女子と男子とのいがみ合いが頻繁に起こっていたし、Aクラスで上手くなじまないのも当然じゃろ」

分かっていたのに、放置かい。随分といい性格してるみたいだな、このヒゲジジィ。

「まあ、そう睨むな。お前も知っての通り、ここは昨年度までは女子校だった場所じゃ。今年共学になって、それがどういう結果にな

るか、分からなかったんじゃ。沢津のことを知っていて放置していたのは、時間が経てば少しはなじんでくるかと思っていたためなんじゃよ。しかし、事態が好転するどころか、成績も下がり、授業もエスケープする有様。この状況がお前にとっていいものだとはとても思えんのだ。元々、お前がAクラスに入ったのは編入試験が抜群によかったからであって、別にお前の本意じゃないだろ。Aクラスを離れて、男子比率の多いクラスでやり直すのは決して悪い事じゃないと思うんだが」

「……」

確かにヒゲの言うとおりではある。いや、まあ、成績の低下や授業のサボリの理由は全然違うし、現在はAクラスの生徒とは完全に和解しているので、ヒゲの言ってることは全然見当違いなのだが、Aクラスを離れるという提案には賛成だ。

この話を聞けば、クラス全員が女子であることに憧れを抱く馬鹿が必ずいるだろうが、それはその環境を実際に体験してないから言えることだ。

異性というのは別の生き物であるし、それが集団で集まると特有の空気を醸し出す。その空気は異性である俺には絶対受け入れられない空気なのだ。会話にしろ、やはり男子と女子とでは会話のノリが違うことがある。弾けきれないことがある。

そういった意味ではいくらクラスの連中と和解したと言っても、無意識のうちに気を使って、気疲れしていることがあるのだ。あと2〜3人でも男子がいれば少しは状況は変わるのだろうが。そう言った意味では他クラスへの再編入というのは悪くない話だ。

これで気軽に話せる友人の一人や二人、出来ることだろう。俺は頷き、言った。

「確かに……そうですね。他のクラスの方が気疲れしなくて、いいかもしれないです」

俺の言葉にヒゲは「そうか」と、短く答えた。

「まあ、本人がそう望むなら、ワシも心おきなく話を進めることが出来る。三学期からは別のクラスに再編入する。編入時にはすべての理由は伏せて、適当に理由を付け足しとく。それで問題ないじゃろ？」

「ええ。大丈夫っす」

「君塚もそれでいいな？」

「え……？」

俺はヒゲの言葉にビックリして思わず瑞穂の方へ目を向けた。瑞穂は相変わらず俯いたままだった。ヒゲは苦笑しながら、瑞穂を指さし、

「本当はな、お前の許可を取らず、一方的に再編入を行うつもりだったんじゃ。しかし、それにコイツが猛反対しおってな。本人の承諾をとって、もし、Aクラスに残りたいのなら再チャンスを与えるべきだ、と言ってきたんじゃよ」

と、言った。俺は目を丸くした。

「君塚はクラス委員長で責任感が強いからの。クラスで孤立していたお前と上手くやれなかったことに随分強い後悔を抱いてたみたいじゃな」

――――違う。責任を感じているのは確かだろうが、瑞穂が気に

しているのはそこじゃない。自分が率先して、クラスの女子を煽動して、俺を攻撃していたことをきっと悔やんでいる。後悔しているのだ。

きっと、今回の件も自分が原因だと思って悔やんでいるに違いない。

そうか。だから、瑞穂は随分と落ち込んだ様な顔を見せていたのか。別にそんなことを気にする必要はないのにな。

「じゃが、これが沢津も一番いいと践んだわけじゃ。ワシもこれが最良の道だと思う。君塚が気に病むことはないぞ」

「は……はい……沢津くんがそう言うのなら……仕方がないと……思います」

弱々しい声で、瑞穂が頷く。

「決まりじゃな。それじゃ沢津。明日、職員会議があるから、お前の再編入の件はその時の会議の議題に出しておく。多分何の問題もなしに通るじゃろ。詳しい話が決まったら、また呼び出すから、そのときまで待っててくれ。他のモノには口外無用じゃぞ」

「了解す」

「君塚、お前もな。クラス連中には再編入のことは口外しないようにな。でないと、この移動には意味がなくなるからな」

「は……はい。わかり……ました」

「うん。それじゃあ、用事は以上だ。二人ともいっていいぞ。沢津、次のクラスでは上手くやれよ？」

笑いながら、そんなことを言うヒゲ先生。俺は苦笑しながら、頷いた。俺は別にいじめられっ子ってワケじゃないし、それなりにコミュニケーションを取れる自信がある。余計なお世話だっつの。俺

は踵を返し、職員室の扉に向かって歩き始めた。瑞穂が俺の後に続くが、どうにも遅い。

ドアの前まで来てもなかなか追いついてこないので、振り向いて、瑞穂の方へ目を向けると俺はぎょっ、とした。

顔が真っ青だった。身体を小刻みに震わせて、瞳を潤ませていた。胸元でぎゅっ、と拳を握りしめながら、ゆらゆらと歩いている。

「ど、どうしたんだ、瑞穂。具合でも悪いのか？」

瑞穂は大きくかぶりを振って「な……なんでもない」と、言うが、どう見て大丈夫じゃない。目がうつろで、足下がおぼついてない感じだ。

「大丈夫……だい――――」

そこで瑞穂の言葉が途切れた。糸の切れた操り人形のように。かくん、と膝が折れて。そのまま瑞穂はどさりと音を立てて、床にうつ伏せに倒れ込んだ。

「瑞穂っ！」

思わず俺は職員室中に響くような大声で彼女の名前を叫び、慌てて瑞穂の元に駆け寄った。すぐさま肩を抱きかかえるが、すでに瑞穂の意識はなく、こちらの呼びかけに応じようとはしなかった――――。

第2話『ショック！？　担任の無情な通達（そうでもない）』（後書き）

続くですですっ！

第3話『安部せんせーのイケナイ授業☆』

「女の子の日？」

俺は目をぱちくりさせながら、保険医が言った言葉を聞き返していた。保険医の阿部先生が気だるげな表情で「ああ」と短く答えた。保険医といえば優しい可憐な女性というナイチンゲール的なものを切望して止まない俺だが、このヒトが満たしているのは一つとしてない。

いや、『女性』というカテゴリは合ってるが、それだけだ。他は何一つとして満たしてない。むしろ真逆だった。眼鏡越しに見える鋭い眼光。眉間に皺を寄せて、俺の姿を見下すよう視線で睨み据えている。別に機嫌が悪い訳じゃない。コレがこの先生のデフォルトだった。口には常にレモンライム臭の漂う禁煙パイポを咥え、かりかりと先を咬む音が聞こえてくる。髪は肩まで伸びたセミロングで、茶色に染まった髪の毛がパーマでウェーブがかっている。小柄な身体にはぶかついた白衣を羽織り、肩の部分が少し、ずり落ちている。そして、その身体から発する強力な威圧感。

目が合うと０．１秒で目を思い切り背けたくなる。超怖い。ぜってえ、このヒトかたぎじゃねえ。眼見ただけで、白旗ぶんぶん振っちゃいそうになるぜ。情けないとか言うな。こええもんは、こええんだよ。

「女の子……の日？」
思わず、もう一度阿部先生の言葉を繰り返していた。すると、阿部先生の眼光が鋭くなり、
「だから、そうだっつってんだろ。耳が遠いのか、それとも理解能力が乏しいのか？　ああん？　頭蓋に穴開けて、腐った脳細胞かき回してやろうか、コラ」
思い切り不機嫌そうな顔でそんなことを言われた。俺は両手をぶんぶんと振りながら、
「すんませんすんませんわかりますっ！　あ、あれですね。生きてるのが痛い日のことですね！　分かってますですよ、ハイッ！」
「はっ、そりゃお前のことだろ。お前の存在そのものが痛いんだ。そろそろ人生終了した方がいいんじゃねえのか？」
ひ、ひどい……。傍若無人な振る舞いを得意とする俺だが、どうにもこの先生だけは苦手だ。こっちのペースに引き込むどころか、逆に阿部先生のペースに飲み込まれ、俺の精神がかき乱される。
例の『異界』事件で、保健室に運び込まれたときも、この人、パチンコにいって、保健室を留守にしていたらしい。よくクビにならないな。家がそっち系で、学園が脅されてるのか。
阿部先生はふう、と溜息を吐き、ベットの方へ視線を向けた。
「生理による貧血だ。以前からコイツは生理痛がちと重くてな。以前にも何度か保健室のお世話になってるんだよ。コイツもクソ真面目だから、用があるときは限界まで我慢しちまうんだろうな。ったく、馬鹿なヤツだ。学校の仕事なんざ、適当にこなしてりゃあいいってのにさ」

そりゃあ、アンタほど適当に生きられれば気が楽でしょうけどね。世の中そんな人ばっかじゃないんですよ。というより、そんな教師や生徒ばかりで、この学園がしめられたら、半年経たないうちにこの学園潰れますよ。

そんなことを反射的に口にしそうとしたが、寸でのところでぐっと踏み留まる。迂闊な発言をしたら、間違いなく俺はコンリートのブーツを履くことになるだろう。

俺はほう、と大きく溜息を吐きながら、ベットの方へ目を向けた。そこには青ざめた表情で、寝ている瑞穂がいる。職員室で倒れた瑞穂を慌てて、俺がおぶって、保健室に運んだのだ。きついならきついって言えばいいのに、限界まで無茶しやがる。自分より他人を優先しちまう厄介な性格だからな、コイツは。大変な病気にかかったかと心配しちまったじゃねえか。

「まあ、よかったです。ただの生理痛が原因で。倒れたときは何事かと思って心配しちゃいましたよ、ははは」

俺は心底安堵しながら、そう言った。すると、

「ただの生理痛……だと!?　……ってめえ、ぶっ殺すぞ」

阿部先生は俺の胸ぐらを鷲づかみにして、低い声で呻いた。

「え?　あ、あの……俺、なにか変なことといいました?」

「ふざけんな。『只の』とか、舐めたことぬかしてんじゃねえぞ、このクソジャリ。テメエら男はいっつもそうだよな。生理痛ってえと、『なんだ』とか『それぐらい』でとかで片付けやがって」

「え……？　え？　いや、別に『只の』ってのは深刻な病気や怪我じゃなくてよかったって意味で、決して生理痛を軽んじているわけでは――――うげっ！」

必死に弁解するが、この先生まるで聞いちゃいない。胸ぐらを掴む力が増して、首がぎりぎり締め付けられる。ちょっ……めっちゃ苦しいんですけど。

「病気じゃねえのはこちらも充分わかってんだよ。それでも辛いヤツは死ぬほど辛いんだぞ。その痛みも辛さも分かってやろうとしないで、『只の生理痛』の一言で片付けようとしてんじゃねえぞ。あんまり調子扱いた態度とってんと、ぶっ殺すぞ」

超怖いし、超苦しかった。次第に俺の身体が持ち上がり、足が床に着かなくなる。こ、この人、俺の身体を片手で持ち上げてやがる！　どんな腕力してるんだよっ！？

「そうだ、その腹の中にドリル突っ込んで、がりがりかき回してやろうか？　そうすりゃ、コイツの辛さも少しは分かって、思いやりが生まれるかもしれねえなあ、ああっ！」

この人、絶対カタギじゃねえええっ！　こえええっ！　めちゃくちゃこえええっ！　あまりの恐怖と首の苦しさに桃源郷が見え始めてきた矢先、

「あ、あの……」

と、阿部先生の背後から、声が聞こえてきた。声の方向に目をやると、ベットに横たわっている瑞穂がこちらを見ていた。どうやら、目を覚ましたようだ。

「あたしなら大丈夫なので……その、拓真くんを離してあげてくれますか」

擦れるような弱々しい口調で言う。まだ全然気分が悪そうだ。それなのに、ヒトの心配をしてくるとは、さすが瑞穂。委員長の鏡だった。

阿部先生は瑞穂の言葉に露骨に眉を顰め、

「拓真くんだあ？」

と、言った。瑞穂の顔が真っ赤になった。手を口に当てて、「あ」と、言い、ぱたぱたと手を振る。

「い、いえっ！　その……すいません、さ、沢津くんを離してあげてくださいっ！　お願いします」

もぎたてフレッシュなトマト顔の瑞穂の顔と俺の顔を交互に見比べると、途端に顔がにやけ面に代わり、「な～んだ、そういうことかよ」と、言って、俺の胸ぐらから手を離した。俺の身体が床に落下し、転がり落ちる。

「げ……げほっ！　がはっ！」

咳き込む俺に阿部先生は顔を至近距離にまで近づけて来て、禁煙パイポをかりかりさせる。そして、

「沢津、お前もなかなか隅におけないな。こんないい女をこますたあ、一体どんな手使って落としたんだ、オイ！　やったのか！？　テメェのイチモツでひぃひぃ言わしたのか！？　ええ。なかなかや

るじゃねえか、テメェ！」

さっきとは態度一転、愉快そうな笑い声を上げながら、背中をばんばんと叩いてきた。どうやら、妙な勘違いをしたらしい。俺は再びげほげほと咳き込んだ。背中叩く力強すぎだっつの。

「委員長の固い処女膜ぶち抜いた感想はどうだった？　コイツは歳に似合わず、いい身体してやがんからなあ。たまらなかっただろうが、ええ？　今度レポートにして提出しろよ、沢津。私がきっちり採点してやるよ」

「せ……せんせい！　なにを……ち、ち、ちがいますっ！」

がばっとベットから起き上がって、あわあわとする瑞穂。そんな瑞穂を見て、阿部先生はかかかっと、笑った。

「照れんな、照れんな。おっ、ちゃんと避妊はしろよ。その歳でパパとママになりたくはねえだろ。もう少し、きンもちい――セックスを楽しんでからでも遅くはねえよ。ガキが出来るとなかなか楽しめなくなるからな。もっともガキに見せつける露出プレイに興じるなら話は別だがな！　うひゃひゃひゃ！」

うわあ……。超ドン引きだった。変態紳士の俺がついて行けないレベルである。知ってますか、先生。同性同士でもセクハラは成立するんですよ。もうヤダ、この先生。

「そうか、そうか。それなら尚更のこと、沢津がしっかりみててやんねえとな。女の子の身体の善し悪しはな、メンタル面にも大きく左右されやすいんだ。いつも生理が重くて、ここの常連の委員長だがな。今まで公衆の面前でぶっ倒れるなんてことは一度なかったんだぜ。今日はなにか、委員長のメンタルに負荷が掛かることでもあ

ったんじゃねえのか？」
「あ……」
瑞穂が俯いて、目を逸らす。やはり、俺が孤立していたときのことを悔やんで、思い悩んでいたのだろうか。
「ま、委員長がきついときはお前がフォローしてやれ。好きな相手がいりゃ、辛いときでも女ってのは踏ん張れるもんさ。きっちり支えてやンな」
そう言って、俺の肩をぽん、と叩くと、保健室のドアを開けて、外に出た。
「え……先生、何処へ？」
俺がそう訊くと、阿部先生はひらひらと手を振り、
「ばっか。気をきかせてやってんじゃねえか。しばらく帰らねえから、好きなだけイチャイチャしてろ。あ、いちゃつくのは構わないが、セックスは控えろよ。生理前後なら、自由に使っていいがな！なんなら、ゴムも提供してやるぜ、うひゃひゃひゃっ！」
史上最低の下ネタ親父ギャグに瑞穂が耳まで真っ赤にして、俯いてる。
「おお、その恥じらいの表情そそるねえ。沢津、今度やるときはあたしも混ぜな。女の感じるテクニック実戦で教えてやるぜえ」
舌なめずりをしながら、怪しげな目つきで瑞穂を眺める阿部先生。アンタ本当に教師か。

「じゃあな。ちゃんと帰りは家まで送ってやるんだぞ」

そう言って、阿部先生は去っていった。ドアを閉める間際に「さ～て、今日は出るといいねぇ」とか、呟いていたので十中八九パチンコだろう。いくら保険医とはいえ、ああいうのが学園にいると、ここは本当に名門なのか疑いたくなる。

「あ、あの……」

と、瑞穂がベットの上で、上目遣いにこちらを見て、声をかけてくる。

「おう、瑞穂。どうだ、気分は。どっか痛いところはないか？」
「うん。大丈夫。まだちょっとくらくらするけど」
「じゃあ、もう少し寝てろ。お前はすぐ無理するからな」
「え？　でも……」
「いいから。後できっちり家まで送ってやるから。心配すんな」

そう言って、俺は瑞穂をベットに寝かせ、布団を掛けてやった。瑞穂は戸惑いながらも、「あ、ありがと……」と、言って、再びベットに身を沈めた。

「……拓真くんが運んでくれたの？」
「ん？　倒れたときのことか？　ああ、俺が運んだ」
「ご、ごめんね。大変だったでしょう？」
「ああ。すっげえ重かった」
「え？　ええっ！？」

瑞穂は大きく目を見開いて、がばっ、と起き上がった。

「わっ、馬鹿。寝てろっつの」
「あっ……あたし、そんな重いかな。少し……ダイエットした方がいいのかな」
「冗談だ、冗談。こんなちびっちゃくて、華奢なのに、重いわけないだろう。ホラ」

そう言って、瑞穂を無理矢理寝かす。そういや、女は無駄に体重を気にする生き物だった。冗談でも重いとかは言わない方がよさそうだな。

「迷惑掛けて……ごめんね。あたし、いつも拓真くんに迷惑掛けてばかり、いる」
「何処がだよ。それはむしろ俺が言う台詞だ」
「でも……」

しゅんとしている瑞穂の頭を撫でてやる。瑞穂は静かに目を瞑って、俺に身を委ねる。

「お前はいっつも余計なこと背負い込むからな。さっき様子がおかしかったのも、アレだろ。俺がクラスで孤立してた時のことを後悔してたんだろ？」
「……」
「アレは昔の話だし、俺たちは和解したんだ。お前が責任を背負い込む必要はないんだぞ」
「……う」
「俺は俺で、新しいクラスで楽しんでやっていくからさ。もう気にすんなって」
「……がう」
「まあ、Aクラスも短い間だったけど、たのしかったよ。瑞穂には

散々世話になったし、本当感謝してるんだ……ぜ？」

瑞穂の罪悪感を消そうと、俺が言葉を続けていると、その最中、瑞穂がぽろぽろと涙を零し始めて、ぎょっとした。え？　なんだ？　また、なにか俺、変なこと言ったか？

「……がう……ちがうよ……あたし、そんないい子じゃない……も、もっと……自分本位のことを考えてたんだよ……ひっく、ひっく……」

な、なんだ？　どういう意味だ？　訳が分からないぞ。

「あたし、拓真くんがAクラスで気を使ってたこと、気付いてた。それに気疲れしてることも。だから、拓真くんがAクラスを抜けて、他のクラスに行けることを逆にチャンスだと考えてることは分かる……分かるの。だ、だけど……それでも……ぐすっ」

瑞穂は頭を撫でている俺の手を両手で、ぎゅっ、と握りしめながら、言った。

「あたし……拓真くんにずっと……Aクラスに……いてほしいの」

「っ！」

俺は大きく目を見開いて、瑞穂を見た。

「だって……せっかく、また会えたのに……六年ぶりに再会できたのに……嫌だよ、また離ればなれになるなんて……ひっく」

「は、離ればなれって……大げさだな、瑞穂は。別に俺は引っ越す訳じゃないんだぞ。クラスが別々になるだけで、いつでも会えるだろ」

「同じじゃないよ！　拓真くんの編入先、新校舎のほうのクラスだって聞いたよ……そんな簡単には会えなくなるよ……」

あー、新校舎のクラスか。まあ、校舎が違うなら、確かに授業の合間の休み時間に会いに行く的なノリは別校舎では出来ないだろうな。でも、昼休みに会いに行くぐらいのことはするぞ。二週間に一度、弁当を作って来てもらってることもあるしな。俺はそう言ったが、瑞穂は泣いたまま、「嫌だ、嫌だ」と、首を横に振るばかりだった。

珍しいな。瑞穂がこんな自分の感情が先行した姿を見せるなんて。まるで駄々っ子だ。瑞穂が俺の両手を掴む力をきゅっと強め、涙でぐしゃぐしゃになった瞳で、

「お……お願い、もう置いていかないで……」

と、言った。

「……」

それを言われると、どうにも弱い。親の都合とはいえ、六年前、引っ越しの時にコイツに寂しい想いをさせたのは確かだからなあ。病院へ入院したときの一件でも本当に俺との再会を喜んでくれていた。俺も瑞穂との再会は嬉しかったが、コイツはそれ以上に再会を喜び、その気持ちを大事にしてくれていた。

その矢先に来た俺のAクラス除籍の話。よくよく考えれば、瑞穂が過剰に反応しても仕方がないのかもしれない。落ち着くまで、もう少し側にいてやった方がいいのかもしれないな。六年前の『再会したら、俺が見つけてやる』約束も守れなかった負い目もあるしな。

瑞穂には相変わらず、危なげなところがあるしな。放っておけない。何かあったとき、コイツを側で護ってやりたい。

俺は――そう思った。

俺は瑞穂の掴まれた手をそっとほどいた。そして、瑞穂の頭を軽くぽん、と叩くと俺は保健室のドアに向かって、歩き始めた。

「あ……」

瑞穂の擦れた声が聞こえる。俺はドアを開けると同時に、

「もう少し寝てろ。夕方になったら送っていってやるから」

と、言った。振り向くと、瑞穂が潤んだ瞳でこちらを見つめていた。ほどいた手をこちらに向けて伸ばしている。

「た、拓真くん……ど、何処へいくの？」

俺は舌打ちした。あー、もうそんな顔するんじゃねえっつの。

「ヒゲ先生のところに行ってくる。明日、職員会議なんだろ？　だったら、今のウチに前言撤回しておく。それと――――」

俺は一呼吸置いて、瑞穂に告げた。

「俺、もう一度、Ａクラスに戻れる方法、どうすればいいか。聞いてくるわ」

そのまま瑞穂の返事も顔も見ないまま、外へ出てぴしゃん、とドアを閉めた。ドアに背を預け、その場に座り込む。
顔が熱い。俺はそのまま膝と腕の中に踞った。あーもう、アイツはわざとやってんのかね。だとしたら、瑞穂は卑怯だ。凄まじく質の悪い女だ。

散々、理屈をこねたが、俺の戻ろうと思った本当の理由はごくごく単純なモノだ。
以前にも思ったことだが、女の涙は武器だ。少なくとも俺にとっては某国の最新兵器よりも強力な破壊力を持っていて、とてもじゃないが敵う気がしない。それをこんなしおらしい姿で懇願されたら、どうするよ？

しかも、その女がとてつもなく可愛い女の子だったら？

言うことを聞いてやるしかないじゃねえか。Aクラスで多少疲れる想いをしても、願いを叶えてやりたくなるじゃねえか。
俺の思考回路なんて、所詮その程度だ。頭の中に俺の両手を握り、懇願してくる瑞穂の姿が浮かび上がり、それを霧散させるために、俺は髪の毛をぐしゃぐしゃと片手でかき混ぜた。

「ったく……本当……馬鹿だよな、男って……」

誰に言うわけでもなく、俺はそんなことをぽつん、と独りごち、大きな溜息を吐いた。

第3話『安部せんせーのイケナイ授業☆』（後書き）

続くのですっ！　次回はあたしが登場なのですよー！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9818s/

BALANCER　AFTER～バランサーアフター～

2011年9月4日18時13分発行